外交最前線 18

東京2020「おもてなし」を尽くす国旗サービス

株式会社アテナ
代表取締役社長
渡辺剛彦
わたなべ　たけひこ　一九六三年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、日本経済新聞社入社。九八年アテナ常務取締役。取締役副社長を経て、二〇〇三年代表取締役社長。

――アテナは、日本でも有数のナショナルフラッグ事業を展開しています。

渡辺　国旗の製作や販売・レンタル、国旗を用いた式典の設営サポートなどを中心に、さまざまな国旗関連の事業を展開しています。皇居や迎賓館、首相官邸などで外国の賓客をお招きするような式典や歓迎行事の場へ、さらには日本で開催される大規模な国際イベントやスポーツの国際大会などへ国旗を提供し、会場での掲揚・撤去のサービスを行うこともあります。

これまで外交の関係では、二〇〇八年の北海道洞爺湖サミット、一三年の日・ASEAN特別首脳会議、一六年のG7伊勢志摩サミット、そのほかアフリカ開発会議（TICAD）や、米国のオバマ大統領、中国の胡錦濤国家主席・温家宝首相、国連の潘基文事務総長らの訪日時の式典などを担当しました。また、スポーツ大会では、札幌、長野の冬季オリンピックや、〇七年の世界陸上大阪大会、一九年のラグビー・ワールドカップ、昨年のオリンピック・パラリンピック東京2020大会、国際イベントでは、〇五年

の日本国際博覧会（愛・地球博）はじめ多くの博覧会などで、国旗関連業務を全面的にサポートしてきました。直近では、本年五月に米国のバイデン大統領、インドのモディ首相、オーストラリアのアルバニージー首相が来日した際に行った、迎賓館での式典サポートや関係エリア内の街路旗設置なども、アテナのフラッグサービスの一例です。

――この事業を始めたきっかけは何ですか。

渡辺　もともとアテナはダイレクトメール（ＤＭ）の製作・発送代行サービスを本業とした会社です。本業のお取引先であった外務省さんを弊社の創業者（現会長）が訪問した際、偶然にも儀典で使用する国旗の取り扱い業務の見直しのご要望があることを伺い、国旗の管理をお手伝いしたいと申し出たことが始まりだと聞いています。

　最初に受注した大きなイベントは、一九七〇年の大阪万博でした。弊社の創業は一九六八年ですから、創業間もない頃です。万博という大事業のフラッグ業務を一手に引き受けたことで、そこで得た報酬を元手にＤＭ事業の機械化を進めることができました。その意味で、本業のＤＭ事業とフラッグ事業は、「相互補完」の関係と言えるかもしれません。

――専門のスタッフを揃えていらっしゃるのですか。

渡辺　専属のフラッグサービス室のスタッフが数名おりますが、式典などの現場には弊社の従業員を招集して案件ごとの必要人員が出動します。実は、ここに弊社の強みがあります。国旗の設置や掲揚には多くの人手が必要です。しかも、要人の訪問日程はしばしば直前まで決まらないし、大規模なイベントも直前に日程や仕様が変更になることが間々あります。弊社はＤＭを基軸としたＢＰＯ（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）サービス全般の会社なので、従業員が多く、かつすぐに動員できます。そのあたりが、ＤＭサービス事業とナショナルフラッグ事業という「二足の草鞋」が成功した理由の一つなのです。もっとも、一部の従業員は本業が忙しい時にフラッグ事業に駆り出されることも多いので、これが本当の「はた迷惑」だ、という笑い話もあります。

開催直前まで大わらわだった会場設営

――東京２０２０大会の国旗の管理・設営は、すべて貴社で行われました。

渡辺　一九七二年札幌冬季、九八年の長野冬季に続き、三度目のオリンピックでした。今回のオリンピックで使った旗は全て弊社で作製し、その数は約九〇〇〇枚になります。

東京２０２０の会場となった仙台スタジアム。旗を壁に張る高所での作業（提供・アテナ）

実は国旗には唯一の正解というものがありません。もちろん著作権もない。したがって旗のデザインや大きさ、色など、最終的には責任者の主観で決まる側面があります。実際、以前には「草原の緑」「血の赤」といった抽象的な注文をされたこともあり、実物に落とし込むのは、時に至難の業でした。今回のオリンピックでは、事前に本番と同じ製造方法で作製した承認旗での確認をしましたが、二〇一九年の時点で承認をいただいているのに、二年後の開催直前に確認すると、修正を命じられたり……。また、大会期間中に急遽やんごとなき事情により、ある国旗のデザインを一部変更する必要が生じました。大至急対応したので本番には間に合いましたが、冷や汗が出ました。

――実際の製作や設置・掲揚には、ご苦労があったかと思います。

渡辺　通常利用の国旗にはいくつかの製作上の標準仕様がまとめられていますが、オリンピックのような多数会場での同時利用では、設置場所の状況によってそれぞれの仕様を変えざるを得ません。今回の大会では四三の会場ごとに旗が最も美しく見えるよう、また適切に取り付け・掲揚ができるよう、大きさや仕様が異なる二六種類の旗を作製し、各会場への設営も微に入り細を穿つ作業を行いました。

――印象に残っている会場はありますか。

渡辺　サッカーが行われた仙台スタジアムには、何度も足を運び、夜通し車を走らせたこともありました。仙台会場には、もともと旗を掲揚するためのバーがあり、当初はそれを利用する予定でした。しかし実際に現地で設営してみると、スタジアムが巨大で設置場所も高所であったため、風が強く吹き込んで、旗がバーに巻き付いてしまうのです。その場で組織委員会の方と相談し、最終的には壁面に国旗を張り付けることに。高所作業車に乗って一晩中、壁面に旗を張る作業を行いました。今となればよい思い出です。

旗の掲揚については、まず一番に注意しなければならないことがあります。それは上下を間違えないこと。今回の国旗設営作業には非常に多くのスタッフが参加したため、慣れないと間違えるリスクがあります。そこでわれわれは上下が逆さまにならないような独自の留具を開発して（特許取得済み）、事故防止に備えました。

――スポーツゆえに、誰が勝つか最後までわからないので、表彰式は大変ですね。

渡辺　そこは東京・臨海エリアに本業で培った物流機能を有する国旗センターを構えているわれわれの強みを生かして、会場に準備されていない旗があれば、国旗センターや近くの別会場から配送して対応しました。毎晩、組織委員会の担当者と協力して旗を移送するオペレーションを組んでいました。

このような努力の甲斐あって、おかげさまで大会期間中、旗に関するトラブルはありませんでした。

――コロナ禍の影響も大きかったと思います。

渡辺　先ほどの仙台の例もそうですが、設営については、やはり現地を見ないと様子がわかりません。しかしコロナの影響で思うように視察をセットできず、どうしても作業がギリギリになってしまったところはありましたね。

儀典を彩る脇役として

――外交上の儀典や国際イベントにおいて国旗が果たす役割をどのように考えておられますか。

渡辺　国旗は、国と国、国民と国民との関係を円滑にするための一つのツールだと思います。それは特別なものではなく、あくまで小道具。脇役として、そこに会する主役の皆さんに自然に受け入れられ、皆さんの心を和ませ、さらには皆さんを応援するような存在であるべきです。逆に脇役でイレギュラーなことが起これば、主役の出席者は気分を害し、場合によってはそれが外交的な意味を持ちかねません。そして国旗がそういう役割だからこそ、正確で美しい国旗を提供したいと、常に強く考えているところです。

私たちは国旗を製作・管理する上で、常日頃から各国大使館とコンタクトをとり、相談をして、承認をもらうプロセスを大切にしています。それが私たちなりのソリューションなのです。やや大袈裟ですが、今回のオリンピックに携わることができて、国旗という名脇役に対するわれわれのこだわりは、世界一だと自負するようになりました。これからもそう言い続けられるよう、頑張らねばなりません。●